

18-3 授業解題

島名：グローバル・エシックス

教科（領域）：社会科

単元（教材）：「アジア州」

対象：附属桃山中学校 1 年 3 組

授業者：秋山雅文 先生

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○本授業は、中学校社会科地理的分野「アジア州」単元の導入として、地元京都の中国人観光客を切り口に、生徒たちのアジア観あるいは異文化理解の基礎認識に焦点をあてる授業である。グローバル化が必然的に要請する異文化理解には、異質な人々の言語や文化に真摯に向き合う態度が必要とされる。換言すれば、ややもすれば陥りがちな文化的他者についての安易な本質主義的理解を超えて、グローバル社会でどのように他者と関係を築いていくかという問題意識の醸成が涵養である。

○教材の具体的な工夫としては、中国在住の日本人の方にビデオメッセージを寄せてもらい、それに分割・編集を加えることで、生徒とインタビューの疑似対話を試みていたことが特筆される。この対話的なビデオ視聴を通して、生徒たちは、みずからの内側にある意図しない先入見を問い直すことが期待されていた。

○また本授業は、その社会科授業として、「有効な質問」の吟味という課題を織り込んでいた。それは基本的には、社会科における「問い」の重要性、また本単元の学習の進め方自体の学習という観点を備えていたように思われる。この点もまた、グローバル世界を生きるうえで必要な能力と一定のかかわりをもつと考えられる。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○グローバル・エシックスの授業としての更なるブラッシュアップの方向性としては、より価値葛藤を意識した授業という観点を挙げておきたい。これまでのグローバル・エシックスで蓄積されてきた授業開発の 2 つの柱としては、①人類共通の価値に気付く、②グローバル世界の価値葛藤に主体的に参画して考え議論する、がある。本授業の軸は①にあったと思われるが、中学校 1 年生という発達段階を考えた場合には、もう少し②の価値葛藤に焦点を当てた授業展開もありうるように思われた（ただし、本授業が単元の導入にあたることを考えれば、今回①に軸足を置くのは必然であったことも付記しておく）。

○授業の出発点にあった観光と地域社会というテーマは、それ自体がグローバルの観点から非常に重要なものである。したがって、異文化への偏見の可能性を確認した後、改めて地元の抜き差しならない課題性へかえるという授業展開も、興味深いオルタナティブとして考えられるかもしれない。